



ニステリ！
デブの
人々

川村湊 + 松山巖 著
宇野亜喜良 イラスト

ミステリーランドの人々

川村湊
—
松山巖

作品社

川村瀧かわむら・みなと——一九五一年、北海道に生まれる。法政大学文学部卒。文芸評論家。一九八二年から四年間、韓国の東亜大学日文科に勤務。文芸評論のみならず、歴史、宗教、民俗と多方面の分野に関心を寄せ、幅広い評論活動を行っている。著書に「異様の領域」「酔いどれ船」の青春、「ソウルの憂鬱」など。

松山巖まつやま・いわお——一九四五年、東京に生まれる。東京芸術大学建築科卒。都市論、建築論、文芸論を巧みに融合させながら独特の評論活動を行っている。「乱歩と東京」（一九八四）で、第三八回日本推理作家協会賞（評論部門）受賞。他の著書に「世紀末の一年」「都市という廃墟」「まぼろしのインテリヤ」など。



ミステリー・ランドの人々

川村瀧十松山巖

宇野亜重良

吉田純二

一九八九年二月五日

一九八九年二月一〇日

和田隆

作品社

〒一〇二東京都千代田区飯田橋二一七-四

電話 〇三三六二一九七五三

FAX 〇三三六二一九七五七

振替 東京六二七二一八三

シナノ印刷

栗田印刷

小泉製本

一三〇〇円

※乱丁本はお取替え致しません。

©1988 ISBN4-87883-145-0 C 0085

書名

著者

イラスト

造本・装幀

第一刷印刷

第二刷印刷

発行者

発行所

本文印刷

表紙・扉

製本

定価

ミステリー・ランドの人々

目次

ミステリーの ランドロイド!

9 明智小五郎

「二寸法師」

江戸川乱歩 ● 昭和2年

13 藤枝真太郎

「殺人鬼」

浜尾四郎 ● 昭和6年

17 法水麟太郎

「黒死館殺人事件」

小栗虫太郎 ● 昭和9年

21 アンボンタン・ポカン君

「ドグラ・マグラ」

夢野久作 ● 昭和10年

25 比良良吉

「人生の阿呆」

木々高太郎 ● 昭和11年

女中伊勢

29

「悪女」

大下宇陀児 ● 昭和12年

小松顯正

「ハムレット」

久生十蘭 ● 昭和21年

加賀美敬介

「高木家の惨劇」

角田喜久雄 ● 昭和22年

巨勢博士

「不連続殺人事件」

坂口安吾 ● 昭和22-23年

金田一耕助

「八つ墓村」

横溝正史 ● 昭和24-26年

65

「点と線」
松本清張 ● 昭和32-33年

三原紀一

61

「十三角関係」
山田風太郎 ● 昭和31年

荊木歡喜

57

「私は前科者である」
橋外男 ● 昭和30年

橋外男

53

「狐の鶏」
日影文吉 ● 昭和30年

柄葉真次

49

「わが—高時代の犯罪」
高木彬光 ● 昭和26年

神津恭助

85

「憎悪の化石」
鮎川哲也 ● 昭和34年

鬼貫警部

81

「四万人の目撃者」
有馬頼義 ● 昭和33年

新海清

77

「事件記者」
島田一男 ● 昭和33年

タイムズの荒さん

73

「野獣死すべし」
大藪春彦 ● 昭和32年

伊達邦彦

69

「猫は知っていた」
仁木悦子 ● 昭和32年

仁木雄太郎・悦子

105

「黒の試走車」
梶山季之 ● 昭和37年

朝比奈豊

101

「枯草の根」
陳舜臣 ● 昭和36年

陶展文

97

「背徳のメス」
黒岩重吾 ● 昭和35年

植秀人

93

「天国は遠すぎる」
土屋隆夫 ● 昭和34年

久野大作

89

「二本の鉛」
佐野洋 ● 昭和34年

真田杏子

- 125
「追いつめる」
生島治郎 ● 昭和42年
- 121
「虚無への供物」
中井英夫 ● 昭和39年
- 117
「大いなる幻影」
戸川昌子 ● 昭和37年
- 113
「ゴメスの名はゴメス」
結城昌治 ● 昭和37年
- 109
「飢餓海峡」
水上勉 ● 昭和37年

- 145
「下町探偵高」
半村良 ● 昭和51-53年
- 141
「DL2号機事件」
泡坂妻男 ● 昭和51年
- 137
「仮面法廷」
和久峻三 ● 昭和47年
- 133
「蒸発」
夏樹静子 ● 昭和47年
- 129
「高層の死角」
森村誠一 ● 昭和44年

- 165
「匣の中の失業」
竹本健治 ● 昭和53年
- 161
「櫻台特急殺人事件」
西村京太郎 ● 昭和53年
- 157
「大誘拐」
天藤真 ● 昭和53年
- 153
「三毛猫ホームズ」
赤川次郎 ● 昭和53年
- 149
「事件」
大岡昇平 ● 昭和52年

- 185 折口信夫
「猿丸幻視行」
井沢元彦 ● 昭和55年
- 181 苑田岳葉
「戻り川心中」
連城三紀彦 ● 昭和55年
- 177 南沢金兵衛
「ナホレオン狂」
阿刀田高 ● 昭和54年
- 173 矢吹駆
「バイバイ、エンジェル」
笠井潔 ● 昭和53・54年
- 169 伊集院大介
「絃の聖域」
栗本薫 ● 昭和53・54年

- 189 酒島警視
「テリシヤス殺人事件」
嵯峨島昭 ● 昭和57年
- 193 衛島良丸
「天山を越えて」
胡桃沢耕史 ● 昭和57年
- 197 桜子
「桜子は帰って来たか」
麗羅 ● 昭和58年
- 201 セシヤ
「あした天気はしじおくれ」
岡嶋一人 ● 昭和58年
- 205 切り裂きシヤック
「切り裂きシヤック、百年の孤独」
島田荘司 ● 昭和68年

- ミステリーの昭和史
戦前遊民からロボットへ
松山巖 209
- 戦後密室列島のミステリー
川村湊 229

人物紹介執筆——— 大山敏

ミステリー・ランドの人々

川村湊十松山巖

本文執筆 ● 川 〓 川村湊、山 〓 松山巖



明 智 小 五 郎

「一寸法師」

江戸川乱歩 昭和2年

小林紋三はフラフラに酔っぱらって安来節の御園館を出た。
不思議な合唱が——舞台の娘たちの死物ぐるいの高調子と
それに呼応する見物席のみごとな怒号が——ワンワンと頭

昭和七年（一九三二）の三月、東京向島の寺島町の通称「おはぐろどぶ」から白地浴衣にくるんだ包みが浮かんだ。包みを解くと男の上胴体である。続いて近くのどぶから、男の首と下胴体が発見される。探偵小説ではない、現実の事件である。

この怪奇な「玉の井バラバラ事件」は、八カ月後に犯人を逮捕し、死体の腕と足を帝大旧土木教室から、残りの腹部を陸軍火薬研究所わきのどぶから見つけ、バラバラ死体の各部がそろったところで解決するのだが、事件が起きると新聞社に江戸川乱歩を犯人とする投書が送られてきた。

乱歩がこの現実起きた事件の犯人であるはずがないが、投書にまったく根拠がないわけでも

えどがわ・らんぼ●（一八九四—一九六五）三重県生まれ。本名平井太郎。幼時から翻訳探偵小説を読みあさり、（科学と芸術の合体）としての国産探偵小説を企図した「二銭銅貨」が発刊早々の『新青年』の編集

ない。というのは五年前に乱歩が書いた『一寸法師』のプロットが、このバラバラ事件にそっくりなのだ。『一寸法師』は、事件と同じ寺島町周辺を死人の腕らしきものを持ってうろつき歩く一寸法師の登場にはじまる。続いて、千住のどぶ川から二十歳前後の女性の右足が、銀座のデパートの呉服売り場から右腕が発見される。このバラバラ死体の発見と富豪令嬢失踪事件が起きる筋である。

五年後に起きた現実の事件が、先行するフィクションをなぞらえたことになる。殺人ですら犯行の根拠をフィクションに求めなければならなくなったのだろうか。とすれば、それはどのようなことだろうか。

『一寸法師』は大正天皇が没する二週間前から朝日新聞朝刊に連載された作品で、乱歩の作品がはじめて新聞に登場したという意義ばかりでなく、探偵小説が社会的に認められたことを示しているが、この作品の中で活躍する明智小五郎も、それ以前とはかなり変貌しているのである。乱歩の初期短篇、『D坂の殺人事件』や『心理試験』などに登場する明智は、木綿の着物によれよれの兵児帯を締め、日和下駄をつっかけて肩をゆすつて歩く貧乏書生である。狭い下宿屋の一部に本を積みあげ、モジャモジャの長い髪をかき回す癖も無精たらしい。

方針に投じてデビュー、「D坂の殺人事件」「心理試験」等を次々に発表、本格推理小説の第一人者となった。だが初の長篇『パノラマ島奇譚』が〈恐怖に色づけされたときの美〉を強調し、同時期に連載・初めて映画化された『一寸法師』(昭和二)に嫌悪を感じるようになる。平林初之輔・甲賀三郎によつて『不健全派』(『変格』)と名指されつつ、『陰獣』『孤島の鬼』等を発表、次第に作風は佐藤春夫が望んだ『猟奇耽美』へと傾いていく。

ところが、『一寸法師』に登場する明智は外出には「自慢の支那服を着て、あいの中折をかぶる」ほどのオシャレになる。変わったのは姿だけではない。貧乏書生の明智が「僕は人間を研究しているんですよ」(「D坂の殺人事件」)と述べるようなはみ出し者特有の屈折した心理を持たなくなっている。

それは乱歩自身も、そうした主人公を求める読者も現実の生活の中で屈折を持たなくなったからだろうか。いや、そうではない。「玉の井バラバラ事件」の犯人は貧しい春画書きであり、被害者はルンペンであった。不況は慢性化し人々は行く先の見えない不安の中にいた。だからこそフィクションもどきの現実の事件にことさら沸きかえった。現実と物語との境目は曖昧となり、読者はリアルなはみ出し者のドラマよりも、キザな名探偵が活躍するサスペンスを過剰に求めたのである。二年後の『蜘蛛男』で明智はステッキをつき、指に大きな宝石をきらめかすインド帰りの探偵として登場する。

『一寸法師』の明智も上海帰りと設定されている。上海やインドに旅行した明智は、当時急激に現実味を増した日本のアジア進出に対応して国の密命を受けたかの印象を与える。だからといって明智がその後の乱歩作品の中で政治的に活躍するわけではない。むしろ、政治的な危機感を忘れるかのように、明智小五郎はひたすらキザな名探偵を演じ続けるのである。

山



藤
枝
真太郎

「殺人鬼」

浜尾四郎 昭和6年

二、三日前の大風で、さしもの満開を誇った諸所の桜花も、
惨ましく散りつくしてしまつたろうと思われる四月なかば
ごろのある午後、私は勤先の雑誌社を要領よく早く切り上

浜尾四郎の『殺人鬼』は、姦通をその動機とした探偵小説である。恐るべき連続殺人事件の舞台となつた秋川家の当主・駿三には、その先輩で親友でもある男の妻を盗んだという過去があつた。その復讐のために、一人の女が秋川駿三に脅迫状を送る。そこから事件は始まるのだが、さらにもう一つの「復讐劇」が潜んでいた。駿三の父・山田信之介をめぐる四十年前の三角関係、姦通事件が、その底流に隠されていたのである。

名探偵・藤枝真太郎はそれを「宿命の三角形」と呼ぶ。事件の発端となつた脅迫状の封筒の裏に押された封印の三角形が象徴するように、事件はまさに「三角形」の構造を基本としている。

はまお・しろう●(一八
九六一—一九三五) 東
京生まれ。男爵医学博士
加藤照麿四男。子爵浜尾
新養子。古川緑波は実
弟。大正二年、東大独
法科卒。検事局勤務のの
ち昭和三年、弁護士を開
業。かたわら法律と文学